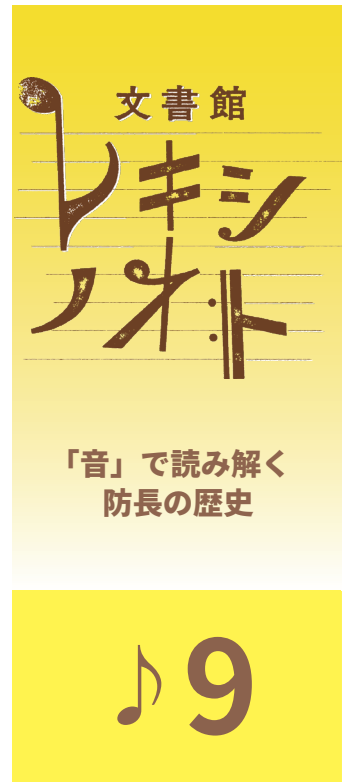




『音楽雑誌 第56・57・58・60号』（今井家文書146～149）



「音」で読み解く
防長の歴史

生活ノオト①

『音楽雑誌』 ～わが国最初の音楽専門雑誌～

【『音楽雑誌』について】

『音楽雑誌』は明治23年（1890）9月から明治31年2月の第77号まで発行されたわが国最初の音楽専門雑誌です。

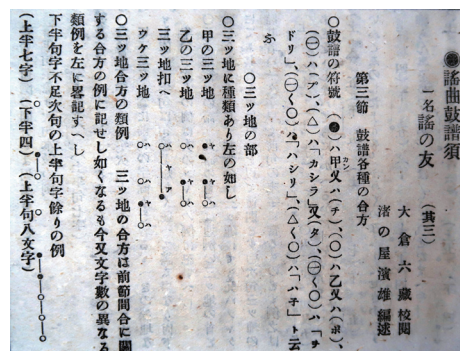
創刊者は四電訥治（しかまとつじ）で、音楽雑誌社から発行されました（第60号以降は共益商社）。当館は、明治29年発行の第56～58号・60号の4冊を所蔵しています（写真上）。

その内容は、音楽に関する提言、西洋音楽理論の講義、新譜の紹介、宮中における歌会の和歌、楽器の奏法、音楽会の情報、各楽団の活動報告、人物紹介、諸広告類など多岐にわたり、当時の音楽を取り巻く状況を見て取ることができます。『音楽雑誌』の紙面から明治20年代末の音楽状況を見てみましょう。

【邦楽の状況】

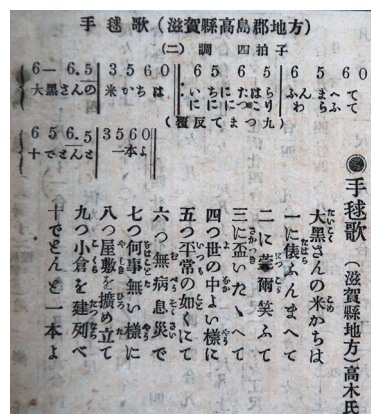
『音楽雑誌』では西洋音楽の啓蒙普及ばかりでなく、邦楽の情報も数多く紹介されています。

右上は謡曲の鼓譜です。伝統的な邦楽の表記法で打ち方が解説してあります（第57号）。



【わらべ歌・数え歌】

滋賀県高島郡地方の手毬歌が紹介されています。五線譜ではありませんが、数字譜で音階が示されています（第56号）。

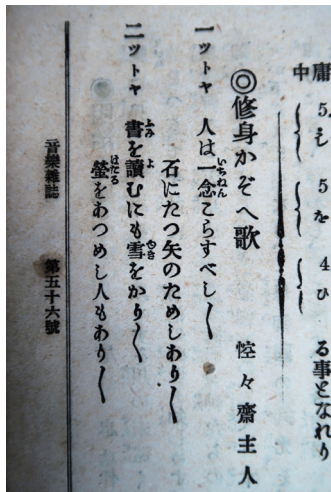


「紙腔琴」
（今井家文書 147）

広告の中に「紙腔琴」（しこうきん）という風変わった機械があります。

これは、明治時代後半に流行した手動式の自動演奏装置で、手前のハンドルを回すと、紙にあげられた音譜が読みこまれ曲が流れます。

レコードの普及以前ならではのものと言えるでしょう（第57号）。

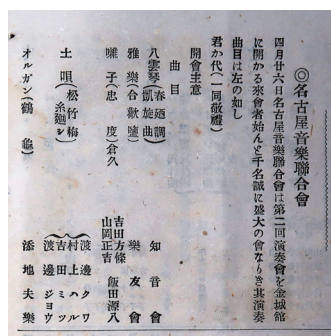
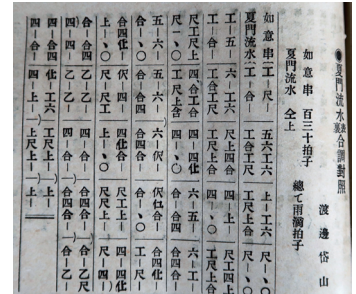


左は「修身かぞへ歌」です。明治20年代後半、「～数え歌」と称し、子供たちに徳目を教える教育唱歌が盛んに作られました。数え歌は、既に定まっていたメロディーに歌詞がはめこまれて数多くの替え歌が作られました。これもそのうちの一つです（第56号）。

【明清楽】

明治時代、中国の民間音楽である明清楽（みんしんがく）が流行しました。それを示すように、『音楽雑誌』にもその楽器である清笛や月琴の楽譜が掲載されています。右は月琴の楽譜です（第56号）。

明清楽の流行は日清戦争を機に衰えました。

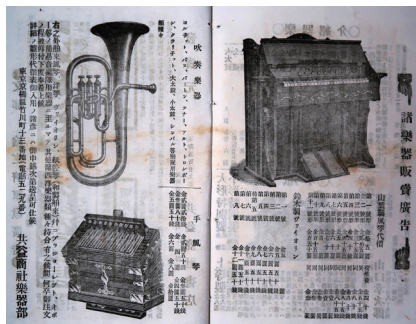


【音楽会のプログラム】

各地で開催された音楽会のプログラムも多数掲載されています。これは名古屋音楽連合会のプログラムで、洋楽と邦楽が一つのコンサートの中で混在していることが分かります。

その他、「幻燈音楽会」と称して、写真をスライド上映しながら演奏する、珍しい音楽会の記事もあります（第58号）。

【バイオリンは庶民の楽器】



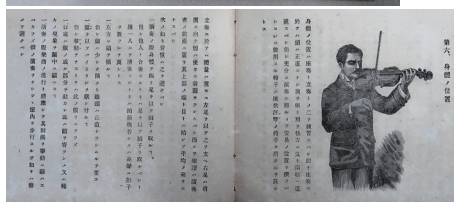
当時、楽器の値段はいくらぐらいだったのでしょうか。『音楽雑誌』に掲載されている楽器の広告から、その値段を知ることができます（第58号）。

山葉（現ヤマハ株式会社）製の風琴（オルガン）が15円～150円。オルガンは、当時、大変貴重で個人の家で持つことは一般的ではありませんでした。また、学校への普及もごくわずかでした。それに対して、鈴木バイオリン社（現鈴木バイオリン株式会社）製のバイオリンは5円～12円50銭の価格帯で、今は高尚な楽器のイメージがあるバイオリンの方が、親しみやすい西洋楽器でした。このことは、バイオリンの教則本やバイオリンの楽譜などがたくさん残されていることから窺えます。

その他、手風琴（アコーディオン）は2円20銭～10円の価格帯でした（第58号）。



左は明治26年に刊行されたバイオリンの教則本です。バイオリンの持ち方から始まり、図入りで弾き方が解説してあります（上下とも木梨家文書608）。



右は大正3年（1914）に刊行されたバイオリンのための楽譜です。曲名は「箏曲 越後獅子」で、「ヴァイオリン音譜」と書かれています（亀田家文書172）。中尾都山による邦楽の五線譜化の試みの一つでした（シートNo.30参照）。

